2006 年度

高次脳機能障害を呈した女性への自立支援のための一考察
―料理の実践を通して―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
髙橋　康子

高次脳機能障害をもつ人たちには、その障害の特性をふまえて適切なリハビリテーションや生活訓練、就労・就学支援などが必要であると考えられている。

本研究では、脳腫瘍が原因で高次脳機能障害を呈した 20 代の女性を対象に、自立した社会および家庭生活を送るために必要な援助とは何かを検討した。対象者は、その障害のために記銘力低下や自発性の低下がみられ「指示待ち」傾向にあった。

研究１では、対象者と同じ疾患と障害を持つ同世代の女性をグループメンバーに加え、大学内にあるトレーニングルームにおいて料理を行った。市販されている料理の本を用い調理手順の課題分析をした。その課題分析表を基に 2 人共同ではなくそれぞれ個別に調理に取り組んだ。料理スキルを身につけることを目的とはせず、調理を通して機能的な問題を見出すことを目的とした。その結果、対象者の「質問行動」や「レシピを見る行動」、「火の調節」、「混ぜる」という調理行動に問題が見られた。また、「行動の停止」・「行動の持続」などの特徴が見られることがわかった。そこでそれらの行動を改善するために介入期には、「見本提示」という支援ツールを用いる対応を模索した。その結果、「行動の停止」や「行動の持続」に変化が見られた。このほかにも、対象者にはグループメンバーの女性の行動を弁別刺激として行動する傾向が見られた。

一方、グループメンバーの女性の影響を受けた対象者が、図書館で働いてみたいと思うようになったことから、養護学校において図書の ISBN コードのコンピューター入力作業にボランティアとして参加することになった。そこで研究 2 では、対象者のコンピューターによる図書入力スキルの獲得と自発的な発言行動をターゲット行動とし、「指示待ち」傾向を軽減することを目的とした。ISBN を入力する際に誤打が続いていたが、声に出して入力することで、誤打が無くなった。声に出して行動することが自己教示として機能することがわかった。また、コンピューターへの入力冊数を対象者が意識することで、作業に対して積極的に取り組むようになった。研究 2 の終了以降、研究１の対象者の調理行動に変化が見られた。この研究 2 の結果、研究１の料理中の「行動の停止」・「行動の持続」等の問題行動が減少した。また、対象者の質問行動にも変化が見られた。コンピューター入力スキルの獲得が対象者にどのように影響したのか考察された。